

近代の地方出身作家の助詞の用法について：宮澤賢治と濱田廣介

著者	小島 聡子
雑誌名	近代語コーパス設計のための文献言語研究 成果報告書
ページ	211-220
発行年	2012-10-31
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告；12-03
URL	http://doi.org/10.15084/00002775

近代の地方出身作家の助詞の用法について—宮澤賢治と濱田廣介—

小島 聡子 (岩手大学人文社会科学部)¹

1. はじめに

近代に入って作られた「標準語」「言文一致体」は、東京語の影響が大きい。地方出身者がそのような「標準語」を話すのに苦労したことはないが、書く場合も方言の影響を少なからず受けている可能性が考えられる。つまり近代の資料に見られる言葉の揺れのなかには、方言の影響が見られる可能性があるということである。逆にいえば、この時代の地方出身者の書いた作品の語法を細かく観察することで、「標準語」がどのように普及していたかを知る手がかりにもなりうるのではないかと考える。

2. 宮澤賢治と濱田廣介

大正末期から昭和にかけて活躍した宮澤賢治 (1896 (明治 29) 年 - 1933 (昭和 8) 年、岩手県) と濱田廣介 (1893 (明治 26) 年 - 1973 (昭和 48) 年、山形県) は、ほぼ同年代で東北地方出身、童話作品を多く手がけたことなど共通点が多い。

このうち、宮澤賢治は 1903 (明治 36) 年に小学校に入学しているが、この翌年 1904 (明治 37) 年からは、国定読本の使用が開始されている。標準語の普及には国定読本の使用がその一端を担っていることは知られており、宮澤賢治はいわば国定読本による標準語教育を受けた第一世代の一人ということになる。

ところで、「標準語」は東京の言葉と関係が深いことは先述の通りだが、近代の作家は、東京の生まれ育ちだったり、あるいは、高等教育は東京で受けるなどある程度の長期間東京の言葉にさらされていたりする人が多い。

濱田廣介も大学入学を期に上京し、その後はずっと東京で執筆活動をしている。しかし一方、宮澤賢治は、高等教育も岩手県内で受けており、何度か上京してはいるものの滞在期間は長くても一年に満たず、比較的東京の言葉との接触が少なかった。「標準語」との関連が深い東京語との接触時間の長さという点で、両者は大きく異なる。従って、基本的にあまり東京語にさらされず、教科書中心に「標準語」を習得した宮澤賢治と、東京語の只中で暮らした濱田廣介とでは、方言の影響の仕方も異なる可能性が考えられる。

そこで、彼らが書き言葉としての標準語を使用した際の言葉づかいについて、特にいくつかの助詞の用法を取り上げ、方言からの影響の有無について分析する。

一般に「東北地方」と一括りにされるが、山形・置賜 (濱田廣介の出身地) の方言と、

¹ satok@iwate-u.ac.jp

岩手・花巻（宮沢賢治の出身地）の方言とでは異なる点も少なくない。しかし、標準語との差が大きかったことはどちらも共通しており、標準語と比べれば似ているところも多いので、比較することには意味があると考ええる。

3. コーパスの利用について

資料としては、宮沢賢治の『注文の多い料理店』（1924（大正13）年発行 約51,000字程度）と、濱田廣介の『椋鳥の夢』（1921（大正10）年発行 約70,600字程度）を使用する。テキストは初版本の復刻を利用し、これらを底本として電子化したものを「全文検索システム『ひまわり』」²によって検索可能な形にすることで、簡易コーパスを作成した。

その上で、両者の言葉の特異性を考えるための基準の一つとして、既存の『太陽コーパス』³、『近代女性雑誌コーパス』⁴を比較の対象とした。当時の言葉の標準的なものとして『太陽コーパス』等を用いたということである。

近代はいわば文体の模索期であり、表現の揺れも大きい。それだけに、現在の口語では用いないような表現が見られた場合でも、それがその作家に特有の語法であるのかどうか、さらに方言の影響があるのかなどを直ちに判断することは困難である。

しかし、簡易な形にせよコーパスにすることによって、個人の中での表現の揺れや言葉づかひの傾向を観察することが可能になる。また、これまでに作られた『国定読本用語総覧』⁵や『太陽コーパス』『女性雑誌コーパス』などのコーパスを用いれば、ある程度当時の標準的な言葉遣いの目安を得ることが可能で、それと比較することで、個人の表現の特異性について検討することもできる。特に本調査の資料は、これらの既存のコーパスが対象としている範囲とほぼ重なっており、比較の対象とするのに最適である。

4. 格助詞の用法

4.1 「へ」と「に」

4.1.1 「へ」と「に」の使用頻度

方向や帰着点・目的地等を表す助詞として、東北方言では広く「さ」や「に」が用いられるが、標準語では「へ」や「に」を用い、「さ」は用いない。

靄岡（2007）は、近代以降の作家の「へ」「に」の使用率を調査し、その違いが地域差に基づくものである可能性を指摘している。それによれば、西では「に」が多く東へ行くほど「へ」が多いという傾向があり、特に宮沢賢治の作品で「へ」の使用率が高いという。

小島（2012）では東北出身の宮沢賢治・濱田廣介の「へ」の使用について調査をした。それによると、用例数と及び「へ」を受ける動詞の異なり語数は下記の通りである。

・助詞「へ」の用例数 宮沢賢治 99例 / 濱田廣介 58例

² 国立国語研究所の開発したソフトウェア。（<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/>よりダウンロード可能）

³ 国立国語研究所（2005）

⁴ 国立国語研究所（2006）により CD-ROM で公開されたもの。（<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/>）

⁵ 国立国語研究所（1997）

・「へ」を受ける動詞 宮澤賢治 48 語 / 濱田廣介 28 語

確かに宮澤賢治は「へ」が多いが、同じ東北出身の濱田廣介では「へ」の用例数も「へ」を受ける動詞の種類も多くない。

また、下の表の通り、同じ動詞で比較しても、濱田廣介よりも宮澤賢治の方が「へ」の使用率が高いことがわかる。

表1 「行く」の場合の助詞の分布

	(行く)	へ	に[目的の例]	を
賢治	33	20 (60.6%)	13[4] (39.4%)	0 (0)
廣介	92	16 (17.4%)	23[1] (25%)	2 (2.2%)

表2 「入る」の場合の助詞の分布

	入る	へ	に
賢治	28	8 (28.6%)	16 (57.1%)
廣介	10	0	8 (80%)

このような違いは、宮澤賢治の方がより方言の影響下にあるということによるものではないかと考える。

先にも述べたが、標準語で「へ」や「に」を用いるような場合に、東北方言では「さ」が用いられることが知られている。この「さ」自体は東北全般で使われ、所在を言う場合に「〔場所〕さ ある」が言えるかどうかなどで東北地方の中でも地域差がみられる。ただし、いつでも「さ」を用いるわけではなく、「に」も用いられる。いくつかの方言資料の記述を総合すると、東北方言の「に」と「さ」の傾向は次のようにまとめられそうである。

- ・「に」と「さ」は分布が重なる
- ・場所を表す場合に必ず「さ」を用いるわけではない。
- ・「なる」の前は「に」が多い。
- ・時間を表す場合は「に」が多い。
- ・目的を表す場合は「に」も「さ」もある。（例「見さ行く」「遊びさ行く」）

一方、標準語の「へ」と「に」の分布は必ずしも上記の「さ」と「に」のあり方とは重ならない。例えば、標準語の「へ」は移動の方向を表すことが多く、移動が感じられない例には用いられにくい。また、「へ」は移動の目的を表す場合には用いられない。しかし東北方言の「さ」は移動を表す場合でなくとも用いられるし、移動の目的を表すのにも用いられるという点で、標準語の「へ」よりも用法が広い。

しかしながら、標準語にも東北方言にも、似たような意味で用いる助詞二つのペアがあり、そのうちの一方の「に」は共通しているとなると、もう一方の助詞「へ」と「さ」と

を対応させて用いることはありそうである。つまり、宮沢賢治は、東北方言で「さ」というところに「へ」を用いた結果、他の人々より「へ」の使用率が高く、また用法も広がった可能性があると考えるのである。

4.1.2 「方」と共起する「へ」「に」の分布

一方、濱田廣介は宮沢賢治ほど「へ」が顕著に多いわけではないが、細かくみると標準語とやや異なる傾向がみられる。濱田廣介の場合、「へ」は「～の方」や「東西南北」の方角、「空」など漠然とした場所を表す語につく場合が多く、特に「方」の場合「へ」と共起するケースが多いのである。表3は、宮沢賢治・濱田廣介・太陽コーパス・近代女性雑誌コーパスの「方」のあとの「へ」と「に」の分布である。

表3 「方」に下接する助詞の分布

	賢治	廣介	太陽	女性
方へ	32	13	858	183
方に	12	9	3493	454

ここでも、賢治の「へ」の使用率の高さは歴然としているが、廣介でも「へ」の方が多くなっている。これは、『太陽コーパス』『女性雑誌コーパス』では「方に」の方が多いとは傾向が異なる。廣介の場合、「へ」の使用そのものが多いわけではないことを考え合わせると、「へ」全体の中で「方」に下接する例の割合が非常に高いということになる。つまり廣介の場合、「へ」の上接語の範囲に明確な意識があるように感じられる。

賢治の場合はそのようなことはあまりなく、具体的な人や場所やらにもつく。

宮沢賢治の「へ」の使用率の高さは、東北方言「さ」の言い換えとして「へ」を用いたことによるものである可能性があるのではないかと考える。

4.2 「～を好き」について

小島(2006)では、宮沢賢治がいわゆる対象語を表す場合に「が」ではなく「を」を用いることが多いことを指摘した。これにも方言の影響があると考えられる。

具体的には次のような例である。

- ・わたくしは、さういふきれいなたべものやきものをすきです。(序 p.7)
- ・あなたは黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どつちをすきですか。(どんぐりと山猫 p.17)
- ・あれを嫌ひなくらゐなら、どうせろくなやつぢやないぜ。(山男の四月 p.60)

「が」を用いている例もあるが、「を」の方が多いのである。

一方、『国定読本用語総覧』によれば、国定読本では「好き・嫌い」の対象はすべて「が」で示されており、「を」が用いられた例はない。「どんぐりと山猫」は第6期国定読本に教材として採用されているが、当該箇所は「どちらがおすきですか」と改変されている。

また、『太陽コーパス』では、「が」を用いた例は皆無ではないが少なく、確認できたの

は次の例である。

- ・言ふまでもなく父といふ人を他の大人よりも好きであるとは思つてみたが (1917 年 13 号「暴風雨の夜」上司小剣)
- ・父君には甘きを御好きかと伺はる (1895 年 2 号「鷹山公の家庭」大橋乙羽)
- ・一度は一度と次第に奥さまは、旦那さまをお好きにおなりでございました。(1925 年 7 号「長篇探偵小説 ハートの九『第二回』」延原謙 (訳); ビ・エル・フアルジヤン (作))
- ・いつも真先に乗物を云ひ出して歩くを嫌ひであつた S が (1917 年 10 号「本田の死」豊島与志雄)

一方「が」で対象が示される例は、「すき(仮名表記, 漢字表記, 及び「お」を伴うものを含む)」の直前に「が」がくる例に限っても 94 例が確認できた⁶。

以上のことから、近代においても「好きだ」「嫌いだ」の対象語は「が」で提示される傾向が顕著であり、宮沢賢治の用語はやや特異であるといえる。ちなみに、濱田廣介では「が」が用いられており、「を」を用いた例はない。

岩手県に限らず、東北方言では一般的に助詞「が」「を」は用いないとされる⁷。「すき」「嫌い」の対象を表す場合も助詞を用いない形が一般的で、『方言文法全国地図』第 1 集⁸の第 5 図「酒が(すきだ)」でも、花巻も含め岩手県全般に、「酒が」という部分は助詞なしの「さけ」、あるいは「さけあ」のような形で現れることから確認できる。

従って、助詞を補おうとした時に「対象だから」ということで「を」を用いたという可能性がまず考えられるのである。

さらに、実は、東北の方言では「すきだ」「きらいだ」より、「すく」「すかない」という動詞の形がよく用いられることも関係している可能性がある⁹。「すく」という動詞では、対象は「が」ではなく「を」で示されるのは珍しくない。例えば『太陽コーパス』でも下記のように「～を好く」が使われている例が、10 例ほど確認できた。

殊にウヰスキーを好くさうだ。(1925 年 1 号 雑学 著者不詳)

つまり「すきだ」の対象を示そうとした場合、方言では用いない助詞を補う必要があり、その際「すく」の助詞からの連想で、「を」を選択したのではないかと考えられる。方言では、助詞を用いないことがやや特異な表現をもたらしたといえよう。

⁶ 『太陽コーパス』は、品詞の情報は付けられていないため、「すき」について、可能性のある表記で検索の上、各用例を確認した。

⁷ 森下喜一 (1982)

⁸ 国立国語研究所編 (1989)

⁹ 前掲『方言文法全国地図』では、花巻周辺に「すかない」形は確認できないが、「すかない」という言い方は現在岩手大学の学生たちの言葉としても聞かれ、若い世代においても一般的なようである。

5. 接続助詞（接続詞）

5.1 「ので」と「から」

まず、原因・理由を表す「ので」「から」の分布を下記の表に示す。なお、『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』では、接続助詞的に使われている可能性が高いものとして、それぞれ読点がついた「ので,」「から,」の形で検索した。

表4 「ので」と「から」の用例数

	賢治	廣介	太陽	女性
ので	27	11	4558	759
から	44	85	7098	1312

これを見ると、宮沢賢治では「ので」対「から」は2対3程度の比率で分布しており、他のコーパスでの分布の傾向と大きく変わらないのに対し、濱田廣介の場合は「から」の出現率が高い。

これについて、方言との関連の可能性を探る。

例えば『方言文法全国地図』第一集では、次のような場合が調査されている。

第33図 「雨が降っているから」の「から」

…山形・置賜、岩手・花巻ともに「kara・gara」

第36・37図 「子供なので」の「な/ので」

…山形・置賜「datta・namoNda/gara・de」、岩手「da・[Nda・na/gara・node」

これによれば、宮沢賢治の地元・岩手県では「ので」という形も見られるが、濱田廣介の地元・山形県置賜地方では、「だったがら」あるいは、「なもんだで」という形が用いられていて、「ので」という形は見られない。従って、濱田廣介にとっては原因・理由を表すような場合の言い方として「ので」の形はなじみが薄かった可能性が考えられる。

5.2 「けれど」と「けれども」

次に逆接に用いられる「けれど」と「けれども」の分布を示す。

表5 「けれども」と「けれど」の用例数

	賢治	廣介	太陽	女性
けれども	18	7	2562	346
けれど	1	168	1179	357

この場合、「も」の有無という点で、宮沢賢治は「も」が付く形が殆どなのに対し、濱田廣介の方は殆どが「も」が付かない形で、両者の間に大きな差がみられる。他のコーパスで見ると、どちらかに圧倒的に偏るということはなく、この偏りはそれぞれに特異である。

こちらも方言との関係を考える。

逆接を表す場合については、『方言文法全国地図』第一集に以下の調査がある。

38 「寒いけれども」の「けれども」

…山形・置賜「geNdo・geNdemo・geNdomo・geNdoN」、岩手「[Ndomo・domo]」

39 「だけど(行かなければならない)」の「けど」

…山形・置賜「geNdo・geNdemo」、岩手「domo」

これによると、両図ともに、山形県・岩手県ともに末尾に「も」の付いた形が広く分布している。特に、岩手県では「も」のない形は殆ど現れない。従って、宮沢賢治が「けれども」ばかりで「けれど」を用いないのは、方言で「も」のつく形しか用いられないことが影響していると考えてよいものと思われる。

しかし、山形県では、置賜地方の調査地点に濱田廣介の出身地・高畠町はないものの、高畠町に隣接する南陽市が調査地点になっており、そこでは両図とも「げんど」という「も」のない形が見られる。特に、置賜地方だけに限ってみると、「だけど」の場合は他の地点でも「も」のない形が現れる。ただし、遠藤他(1997)によれば、山形県全域で「けんども」が優勢であり、特に置賜地方は「けんども」の形を用いるという。

従って、濱田廣介が「も」のつかない形の方を用いることについては、方言との関係で二通りの可能性が考えられる。まず、濱田廣介自身が母語方言で「も」のついた形を用いていた場合、「けれども」という「も」のついた形は「方言である」という意識が強く、書く際には敢えて「も」のない形を用いたという可能性がある。しかし、『方言文法全国地図』の分布をみると、濱田廣介自身が母語として「も」のない形を使っていた可能性もあり、その場合、そのまま方言の影響で「も」のない「けれど」の方を用いたと考えることができる。

5.3 「～ないに」について

宮沢賢治の作品の中に、次のような「～ないに」という例が見られる。

もうそのころは、ぼんやり暗くなつて、まだ三時にもならないに、日が暮れるやうに思はれたのです。(「水仙月の四日」p.96)

『太陽コーパス』では、逆接とおぼしき「～ないに」の例は4例見られるが、下記の例を含め、いずれも、「～ないのに」という意味である。

蓋し歐洲の夏は九時十時迄も日は暮れないに、道路工夫の如きは五時以後の労働に對しては夜間勤務として大割増を要求し(1925年11「死線にさまよふ日本—經濟的危機の真相と救済策—」矢野恒太)

先の宮沢賢治の例も、同様に「三時にもならないのに」という解釈も可能ではある。

しかし、宮沢賢治の出身地の花巻方言を集めた花巻市教育委員会(2005)には下記のような語が収録されている。

「～ネァニ」＝「～しないうちに」

(文例)客「(来)ネァニ」片付けろ　＝　客が「来ないうちに」片付ける

このことから、先の例は「ならないのに」ではなく、「ならないうちに」という意味で用い

ている可能性がある。

6. 副助詞等について

6.1 限定の「だけ」の用法

宮沢賢治には、「百円ぶん」のように数量の程度を限定する意で用いられている「だけ」の例が見られる。

・もう九本切るだけは、とうに山主の藤助に酒を買つてあるんだ。(「かしはばやしの夜」
p.133)

・途中で十圓だけ山鳥を買つて東京に帰りました。(「注文の多い料理店」p.62)

特に、2つ目の例のように「金額 だけ」という場合、ここでは単に「十圓ぶん」購入したという意味で用いられていると思われるのだが、現代語では「だけ」は「それと限る」限定的な意味合いが強いため、つい「もっと買えるのに10円分しか買わない」というニュアンスを感じてしまいかねない。

ただ、このような単に数量の程度を示す「だけ」の用法は、特に方言的な用法というわけではなく『太陽コーパス』でもかな書きの「だけ」では、以下のような例が見いだされる。しかし決して多くはないし、「金額 だけ」という例はなかった。

・丁度其の眼の數だけ、錢を積んで主婦に渡した。(1895年04「ソクラテスの滑稽(続)」
巖谷小波)

・豫め翌年の買入額を約束し、生産者をして安心して約束額だけを生産せしむるが如きは生産者保護の一法たるを得んか(1901年08「経済時評」坪谷水哉)

・二十歳の者は四十二、三十歳の者は卅四、四十歳の者は二十八、五十歳の者は二十一、六十歳の者は十五年だけの餘命が有るものと認めるやうに成つた(1901年12「科学雑談(一)」局外閑人)

・此會費徴集に關しては各部長十分責任を帯びて會員數だけの金高は必ず集むる事(1895年07「海内彙報」)

・養豚會社やうとんくわいしやは一番盛いっばんさかんだが、五萬圓ごまんゑんの資本だけしほんの財産ざいさんがありますかどうか歎奈何歎。(1901年05

「投机」内田魯庵)

ところで、『方言文法全国地図』第1集には、「52 みかんを百円ぶんください」という表現についての調査がある。つまりこのような場合に、標準語としては「ぶん」が想定されるということであろう。この調査において、岩手県花巻周辺では「dεε・dee」などの語形が採集されている。(参考までに、山形県「gana・ɲana」である)

宮沢賢治が「だけ」を用いたのは、この「でえ」「だえ」からの影響の可能性も考えられるのではないか。

6.2 「くらい」について

また、限定の意味を表す副助詞について宮沢賢治は「くらい」という語においても、他

とは異なる使い方をしていることを小島(2008)で指摘した。特徴的な点として、「くらい」の前に格助詞「の」を用いることがあげられる。

- ・ 栃の団子をとちの実のくらゐ残しました。(鹿踊りのはじまり p.88)
 - ・ 六疋めの鹿は、やつと豆粒のくらゐをたべただけです。(鹿踊りのはじまり p.95)
- また、先の「ぶん」のような量を示す意味で「くらい」が用いられている例もある。
- ・ わたしたちは、氷砂糖をほしいくらゐもたないでも(序)

これは「ほしいぶんだけ」あるいは「すきなだけ」というような意味かと思われる。『太陽コーパス』では「ほしいくらい」という例はあるが、「暑くて、扇子が欲しい位だ」というような例で「くらい」の意味が異なっている。

これらの用法については、方言からの影響は直接は見いだせないが、方言では限定を表すような表現全体が標準語と異なっており、それがこのような特異な用法となって現れた可能性も考えられる。

6.3 「～ぐるみ」…濱田廣介の場合

副助詞ではないが、限定的な意味を加える接尾語の例も取り上げておきたい。

濱田廣介には次のような「～ぐるみ」という例がある。

- ・ クツクウの青い體は葉つばぐるみ揺れました(「青い蛙」p.193)

これは、「上接の名詞とともに全体で」の意で用いられる語で、「～ごと」と同様の意味を表す。

現代語では「地域ぐるみで取り組んでいる」や「組織ぐるみの犯行」などのように用いられるが、規模の大きい組織などについて使われることが多いように見える。

ただし、近代語としては『太陽コーパス』でも下記のような例が見いだされる。

- ・ 二分金を御札ぐるみに帯の間へ入ぬ(1895年01号「従軍人夫」饗庭篁村)
- ・ 盆ぐるみ推進めた番茶の土瓶を(1909年14号「実印と預金帳」柴田流星)
- ・ 地所ぐるみ借り入れたり(1917年13号「暴風雨の夜」上司小剣)
- ・ 馬一頭と馬丁と三人ぐるみ一緒になつて、厄介になつてゐたのだから(1925年07号「明治初年外交物語(その九)青年外交家の台頭」豹子頭)
- ・ 大雅寺を寺ぐるみ賣るから買つてはどうかと(1925年12号「蕪村寺」橋本閑雪)

なお、上記の例の使用者の出身地は、饗庭・柴田が江戸、上司・橋本が上方である。

このように「ぐるみ」を用いることは、近代ではさほど珍しい用語であったわけではないことがわかる。また、同様の意の「ごと」も9例ほど見いだされ、どちらの形も用いられていたということになる。

ところで、『方言文法全国地図』第1集には、53「みかんを皮ごと食べた」という調査があり、それによると、「ごと」の意は、山形県一帯で「garami・ɲarami」という形が用いられている。どちらも使われるとはいえ、「ごと」ではなく「ぐるみ」を選んだのは、方言で「ごと」を用いないことが関係している可能性も考えられるのではないか。

7. 今後の課題

今回の調査では、比較する方言の資料としては殆どを『方言文法全国地図』を利用した。これは、1989年に刊行されたものであり、調査はそれ以前の13年間をかけて行われたという。従って、宮沢賢治・濱田廣介のそれぞれの作品が出された時代よりやや新しい言葉ということになる。ただし、濱田廣介の地元に近い南陽市の調査対象者の生年は1913年、宮沢賢治の地元・花巻市の調査対象者は1911年で、宮沢賢治・濱田廣介よりは若い世代が異なるほどではないので、参考にはできるものとする。しかし、さらに古い言葉を記録した文献を探すことは必要である。

また、標準語の例として用いた『太陽コーパス』については、やや調査が粗いところがあり、こちらもさらに精密な調査を試みたい。

文献

- 国立国語研究所 (1989) 『方言文法全国地図』第1集
- 国立国語研究所 (1997) 『国定読本用語総覧 CD-ROM 版』三省堂
- 国立国語研究所 (2005) 『太陽コーパス: 雑誌『太陽』日本語データベース』博文館新社
- 国立国語研究所 (2006) 『近代女性雑誌コーパス』
- 小島聡子 (2006) 「『注文の多い料理店』の言葉について」アルテス リベラレス (岩手大学人文社会科学部紀要) 第78号、pp.89-103
- 小島聡子 (2008) 「宮沢賢治の童話の語法について - 副助詞「くらい」の用法を中心に - 」『言語と文化・文学の諸相』(岡田仁教授・笹尾道子教授退任記念論文集) pp.121-132
- 小島聡子 (2012) 「宮沢賢治の童話における「標準語」の語法—方言からの影響について—」『近代語研究第十六集』、pp.329-347
- 遠藤仁 他 (1997) 『日本のことばシリーズ 6 山形県のことば』(編者代表・平山輝男) 明治書院
- 靄岡昭夫 (2007) 「関西以東の「へ」と「に」の分布について—近代の小説を資料として—」『計量国語学』第25巻第8号、pp.341-351
- 花巻市教育委員会 (2005) 『花巻ことば集 せぎざくら』
- 森下喜一 (1982) 『岩手の方言』教育出版センター